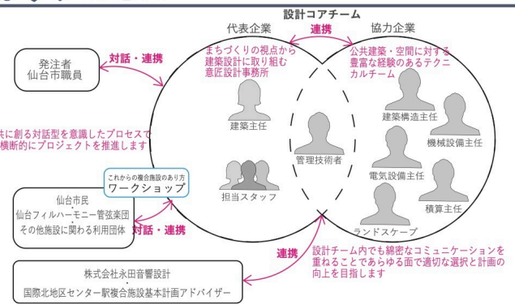
イ　実施方針

仙台の文化芸術を伝え、人・文化・まちを育む創造の拠点を実現する

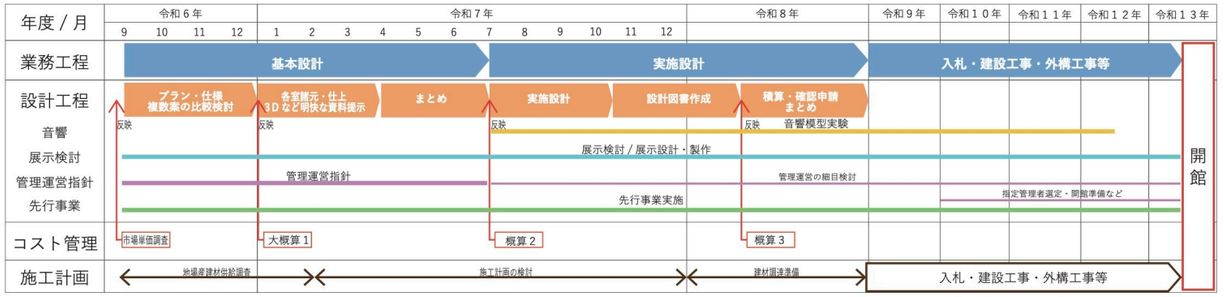
取組体制と設計チームの特徴　- 市民の文化力を活かすプロセス -

顔の見えるチームを中心に空間・運営・活動を一体的に考える

・まちづくりの視点から建築設計に取り組む意匠設計事務所と多数の地方公共建築の実績を持つ構造事務所、設備設計事務所で建築設計チームを編成します。さらに、公共空間の設計経験が豊富なランドスケープの専門家による分野を超えた協働により、まちのトータルデザインに取り組み、空間計画から空間の利用形態まで一体的に考えます。
・窓口を一元化することで設計チーム、仙台市、アドバイザーなど各関係者との円滑なコミュニケーションを可能とし、共有クラウドによるタイムリーな情報共有に努めます。また、市民をおいていかない情報発信や施設への関わり代となる工夫に努めます。



設計工程計画



設計の理念と考え

誰もが多様な文化を存分に享受できる複合文化施設

・観客と演者（見る / 見られる）の関係性を再考し、施設を訪れるあらゆる人が、音楽・舞台芸術をはじめとする様々な文化を楽しみやすい空間計画を目指します。
・現況の敷地内を通って駅へ向かう学生がいるようでした。この寄り道のような通り抜け動線を新たな施設内にも確保することで、日常動線の中に文化・芸術と交わる機会を演出します。

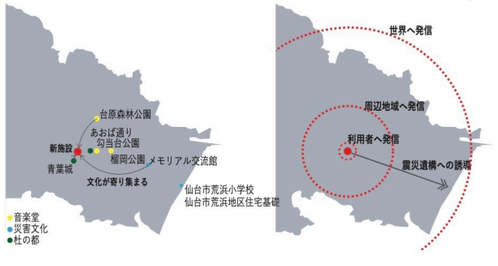
震災メモリアルに対する考え方

・展示、アーカイブとして、震災の記憶を伝承するのみならず、そこに音楽や舞台芸術が介入することで、自らや仙台の未来へ希望をもてるような場を目指します。
・災害文化を日常的に感じられる一方で、震災に関する式典などの際には施設の使い方を大きく変え、非日常性が効果的に生まれるような計画とします。

世界に発信できるホールの在り方

・仙台フィルハーモニーが世界へ羽ばたいたように、本施設も世界基準の設えを備えるべきです。そのために建築的な斬新性や高性能に加え、本計画の経緯と今後のプロセスも重視します。

閉じられがちな音楽施設の境界をほどくことによって
多様な文化が寄り集まり、日常に開かれ、世界まで発信されることを目指します



設計を進めるうえで特に留意すること

対話を重視した設計プロセスで文化の拠点を実現

・本業務では、市民や仙台市、そして待望のレジデントオーケストラとなる仙台フィルハーモニーの方々の思いを受け止めながら、これまでの基本構想をより良い形で実現へと導くことが重要です。そのために、視覚的に分かりやすい資料を用いた対話プロセスを重視します。

徹底的な専門協議と市民参加の調停

・施設計画、環境性能、ホール音響、コストを中心に、早期から専門家と協議を重ねます。一方で、仙台市民の方々に対しても、CG や模型を使った意見交換会やワークショップの実施を検討します。文化力が高い仙台市民の意見を取り入れることで、専門家だけに留まらない開かれた設計プロセスとし、より地域に愛着を持っていただける施設の実現を目指します。

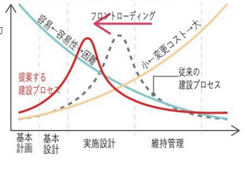
模型を使用した WS の様子

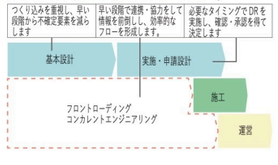
WS の過程と背景を広報誌にまとめる

みんなの思い、考えを統合する

コストコントロールに対する考え方

・社会情勢の変化や、資材物価の変動状況を常に確認し、基本設計段階から定期的にコストチェックを行います。
・将来の財政負担を軽減するため、早期から市と協議を重ね、維持管理を含む性能・コストの実現目標を設定します。





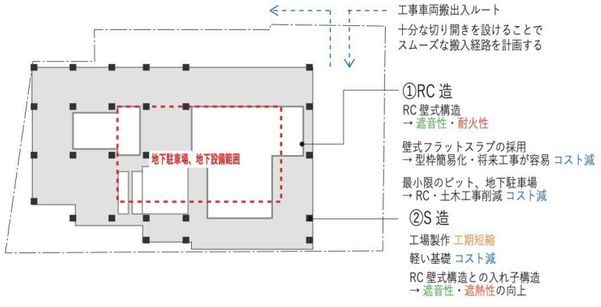
コスト縮減に関する提案

遮音・耐震の確保と効率的な施工計画

・音楽ホール等の壁・屋根は RC とし、経済的に遮音性と耐火性を確保します。その他の一般室や、外側のメインフレームは鉄骨造を併用することで、効率的に高い耐震性を確保します。
・外形フレームと内部のコアが二重の入れ子構造となることで、遮音性・遮熱性を高め、空調エネルギーの削減に貢献します。
・地下駐車場と地下設備はホール周辺に限定し、掘削量と RC 工事を縮減します。RC 部分を先行して施工することで、作業ヤードと車両動線を確保し、効率的で安全な施工計画とします。

経済的かつ耐久性の高い仕様で長く親しまれる施設

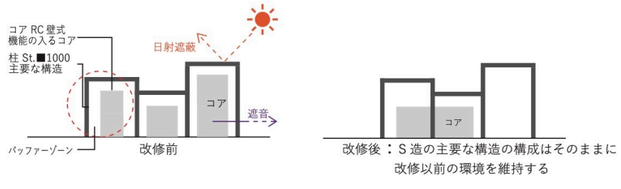
・使用材料を限定し、空間的な統一感を確保するとともに、工種を減らすことで単価の値引き率を高め、人件費を削減します。
・外装はガラスを主とすることでメンテナンス性を高める一方、庇の出を調整することで、日射負荷の低減を慎重に検討します。
・Zeb-Ready を実現し、少ないエネルギーで運用することで、震災メモリアル拠点に相応しい、耐災害性の高い施設を目指します。使用エネルギーの見える化も積極的に実装し、使用開始後のさらなる省エネ運用にも対応します。



将来の大規模改修を想定した設計上の配慮

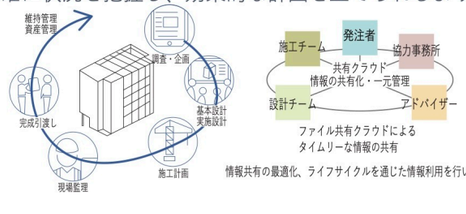
設備機器の更新、用途変更にも柔軟に対応できる計画

・外形の構造フレームは柱と水平スラブによるシンプルな構成とし、主要な構造と機能の入る空間が分離することで、十分な作業スペースの確保や、改修によるプランの変更にも柔軟に対応できるフレキシブルな空間を計画します。
・汎用性の高い材料、製品を多用することで、工事費の削減のみならず、維持管理や将来的な修繕、更新に配慮します。
・機械設備や配管配線の増設更新予備スペースを確保します。そのための十分な床荷重の設定も行います。



デジタル技術による合理的な設計と運用後の状況把握

・自然採光や温熱環境、気流シミュレーション等の ICT 技術を導入し、合理的な設計に活かすとともに、運用後の状況把握にも役立てます。また、設計・施工時に使用する BIM を、建物の運用にも活かし、データを残すことで、将来的な改修時にも的確に状況を把握し、効果的な計画を立てられるようにします。



情報共有の最適化、ライフサイクルを通じた情報利用を行います。